

## 9 慢性甲状腺炎を合併した原発性副甲状腺機能亢進症で、選択的静脈サンプリングが局在診断に有用であった1例

高松はるか・大山 泰郎・谷 長行  
 関 裕史\*・佐藤雄一郎\*\*・根本 啓一\*\*\*  
 県立がんセンター新潟病院内科  
 同 放射線診断科\*  
 同 耳鼻咽喉科\*\*  
 同 病理\*\*\*

症例は67歳の女性。家族歴に内分泌疾患を認めず。1997年より骨粗鬆症として近医で治療。1999年尿路結石で他院泌尿器科受診時に原発性副甲状腺機能亢進症と診断。同院内科での諸検査で局在診断不明にて、2004年当科紹介。慢性甲状腺炎(橋本病)の合併を指摘。各種画像検査(MIBIシンチ・エコーCT等)を複数回施行したが局在診断不明。高カルシウム血症悪化し、ビスホスホネート製剤(内服・点滴静注)・カルシトニン製剤(筋注)にても血中カルシウム12-14mg/dLと高カルシウム血症クリーズが懸念される状態。CTで右腎粗大結石・腎実質萎縮を指摘。腎機能障害も緩徐に進行。局在診断・治療のため、選択的静脈サンプリング・手術の必要性を再三説明したが拒否。2009年同意を取得。選択的静脈サンプリングにて右内頸静脈中部でのPTH上昇、右中甲状腺静脈でのPTH著明高値を確認。2010年甲状腺右葉切除。肉眼所見で副甲状腺腫瘍の確認不可であったが、病理で副甲状腺結節性過形成(局在は甲状腺右葉下極寄り峡側)と慢性甲状腺炎を確認。術後血中カルシウムは正常化。慢性甲状腺炎の合併により原発性副甲状腺機能亢進症の局在診断に難渋し、選択的静脈サンプリングが有用であった、示唆に富んだ1例として報告する。

## 10 Coaccess Needle を併用し、生検診断しえた脾原発悪性リンパ腫の1例

阿部 寛幸・石川 達・長島 藍子  
 廣瀬 奏恵・窪田 智之・富樫 忠之  
 関 慶一・本間 照・吉田 俊明  
 上村 朝輝・小山 覚\*・石原 法子\*\*  
 済生会新潟第二病院消化器内科  
 同 血液内科\*  
 同 病理検査科\*\*

悪性リンパ腫は症状、血液検査、画像診断から診断を絞り込むことは可能であるが、確定診断、治療方針の確定には組織生検が不可欠である。

症例は70歳代男性で腹痛を主訴に受診。sIL-2R 3070U/mlで、悪性リンパ腫が疑われるも表在リンパ節腫大を認めず、画像より脾臓内病変および脾尾部周囲リンパ節腫大のみを呈し表在からの生検困難であった。経皮的脾生検にては、出血のリスクを伴うため、脾動脈へカテーテルを留置し、大量出血時には血管塞栓術を施行する予定とし、Coaccess Needleを併用し、脾生検後ルートをRFA焼灼止血し、安全に脾生検を施行しえた。その生検結果にて悪性リンパ腫の確定診断に至った症例を経験したので報告する。

現在経皮的脾生検の生検方法は、出血などの合併症の危険性から国内では一般的な生検方法とはなっていない。本法は経皮的脾生検時に有用な方法を考えられ報告する。

## 11 著明な出血症状を呈した急性期特発性血小板減少性紫斑病に対し Romiplostim が奏功した1例

松尾 佑治・岡塚貴世志・阿部 崇  
 宮腰 淑子・瀧澤 淳・増子 正義  
 古川 達雄・鳥羽 健・布施 一郎  
 小玉 誠

新潟大学医歯学総合病院第一内科

症例は51歳、男性。

【主訴】紫斑、口腔粘膜出血。

【既往歴】脂質異常症。

【現病歴】過去に血小板減少は指摘されたこと

はなかった。1日前からの紫斑、口腔内出血を主訴に8月1日当院内科外来を受診した。血小板数0.1万/ $\mu$ lと低値で、著明な出血症状も伴っていたため、精査目的に緊急入院となった。末梢血液像に異常を認めず、DICも認められなかった。特発性血小板減少性紫斑病（ITP）と診断し、直ちに大量 $\gamma$ グロブリン療法（IVIG）を行ったが効果不十分なためステロイド治療を追加した。血小板の増加は認めず8月14日突然の酸素飽和度の低下を認め胸部レントゲン、CT上肺胞出血が疑われた。大量の濃厚血小板輸注にもかかわらず肺胞出血を繰り返したため、第Ⅶ因子製剤を投与し肺胞出血は改善傾向を認めた。血小板上昇を図るためビンクリスチン、リツキシマブも投与したが効果は認めなかった。このため8月20日からトロンボポエチン受容体作動薬（Romiplostim）を週1回投与したところ8月28日より血小板上昇を認めた。Romiplostim維持投与にて血小板数が安定したためステロイドを漸減し、10月14日脾臓摘出術を行った。脾臓摘出術3日目より血小板は更に上昇しRomiplostim投与から離脱可能となった。

【考察】血小板1万以下のITPは時に致死的な出血を来すことがあり緊急的な治療の対象になる。通常はIVIG、ステロイドに反応するが、時に本例のような抵抗性の症例があり治療方針に苦慮することもある。Romiplostimは慢性期ITPに対し高い有効性が報告されているが、本例は緊急時の治療としても有効である可能性を示唆している。

## 12 腎不全末期に多彩な臨床像を示した大動脈炎症候群の1例

牧野 達夫・島 賢治郎・酒巻 裕一  
外山 美央・中村 元・本間 則行  
県立新発田病院内科

症例は65歳、女性。40歳で蛋白尿と血尿を指摘され42歳時腎生検でIgA腎症と診断、Ccr123ml/min。58歳急性腹症にて試験開腹されるも異常所見なし。このとき左橈骨動脈を触知せ

ず、血管造影で左鎖骨下動脈の完全閉塞と上腸間膜動脈の狭窄を認め大動脈炎症候群と診断された。PSL30mg内服開始、漸減し5mgを維持量としていた。X年8月（65歳）、脱水から脳梗塞を発症、保存的に軽快した。このときCcr12.7ml/min。X年10月、内シャントを造設し血液透析へ導入したが、透析中の血圧低下を契機に脳梗塞を発症。輸液のみで軽快した。X年11月に急性心不全を発症し除水でも軽快せず、大動脈炎症候群による冠動脈病変からの狭心症であった。心カテ後、足趾のコレステロール塞栓症、多発性脳梗塞を発症し認知症も出現した。X年12月、狭心症に対し冠動脈バイパス手術を行ったが透析中及びそれ以外でも失神発作が頻発した。X+1年3月退院、以降週3回の外来維持透析を行っていた。X+1年7月、S状結腸憩室穿孔から汎発性腹膜炎を発症し、洗浄ドレナージ、Hartmann手術を施行した。しかし術後、透析時の血圧維持が困難となり死亡に至った。心臓血管病変を有する大動脈炎症候群患者の予後は不良で、末期の腎不全に至ったとしても透析治療が実施できることは少ないといわれている。本症例は末期腎不全期に脳梗塞、狭心症、足趾虚血症状などの血管病変が顕在化、多彩な臨床像を示し、興味深い経過を示したため報告する。

## 13 維持透析中に発症した *Aeromonas hydrophila* による壊死性筋膜炎の1例

高井 千夏・霜鳥 正明・中山 均  
斎藤 徳子・島田 久基・宮崎 滋  
川崎 聡・佐藤 攻\*・角田 和彦\*  
上村 一成\*\*・間庭 圭一\*\*

信楽園病院内科  
同 外科\*  
新潟大学整形外科\*\*

症例は84歳、男性。76歳時慢性腎炎による腎不全のため血液透析に導入。2011年1月胃癌で胃全摘術を受けた。同年8月某日16時頃より左下腿の発赤、腫脹、疼痛、左手背の軽度腫脹が出現し翌朝当院へ搬送され入院。下痢症状はなく四